

造形活動を通して自らの感性や表現力を高める授業 「図画工作基礎」

平松清美

文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻

(2006年11月8日受理)

“Basics of Arts and Crafts”

Raising to Motivation and Self Expression of Students in Formative Activities

Faculty of Cultural Development, department of Cultural Development,

Major in Primary Education,

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

HIRAMATSU Kiyomi

(Received November 8, 2006)

(1) 授業研究の課題と目的

小学校学習指導要領の図画工作の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、作りだす喜びを味わうようにするとともに造形的な創作活動の基礎的な能力を育て、豊かな情操を養う。」である。すなわち、児童の感性や表現力を養い、創造性を豊かにすることを目的としている。

小学校教諭をめざしている学生の「図画工作基礎」の授業に於いては、まず、学生自らが感性や表現力を高め、表現の喜びを体感することである。そうした体験的な学習活動を展開する過程の中で基礎的、基本的な表現技法や能力を身につけ、教師として適切な指導援助ができる力を付ける授業のあり方を追究する。そして、学生が教師になったとき、児童一人一人の心の動きや願いを受け止め、その願い実現のために適切に、優しく援助できる教師としての指導力を高めることを課題として授業のあり方を考察する。

図画工作基礎の内容の領域では、A「表現」B「鑑賞」の2領域で構成されている。

本授業ではA「表現」における絵画や立体作品の造形活動を現小学校の教科書の題材と合わせて学習し、B「鑑賞」の学習を展開する。

(4月の学生の実態)

- ・図工は好き、形もうまく取れる.....35%
- ・絵画は苦手、うまく描けない.....65%
- ・混色して色作りがうまくできる.....30%
- ・色づくりはうまく表現できない.....70%

混色して豊かに表現できる学生は35%であり、ほとんどの学生が過去に於いて、混色するなど「自分の色づくり」を体験して喜びを感じたことが少ない。表現の基礎能力が乏しい。また、のこぎり、金槌、ペンチ、のみ、きり、万力などの道具の扱いも85%が体験していない。造形活動が多い小学校の図画工作の指導ができる教師になるためには、下記のような課題をクリアしなければならない。

㊦色彩感覚を身につけ、表現技法を習得する。

④「絵画・立体」の表現の喜びを体感し、造形活動を楽しみ創造力を高める。

⑤体験し、体得して学んだことを教師の指導性と関係づける力を付ける。

上記の課題を解決するために下記のような目的を設定した。

表現したいことを明確に持ち、イメージを広げ、色づくりや表現の技法を創意工夫し自由に表現する。そして、自らの感性や創造性を高め、表現の喜びを体感する。

自己の体験を児童の学習活動と重ねて考える。そして、児童の失敗や願いを受け止め、適切に指導援助する力を身につける。

表現した作品を鑑賞し、互いに評価し合う。そして、他の作品から表現や工夫の面白さ、個性の面白さ等、作品の見方を学ぶ。

本授業では、学生自らが造形活動に取り組み、その過程において体験した様々な見方、感じ方や考え方、表現方法や技法を習得し、基礎的、基本的な力を身につける授業を追究する。

そして、児童が本来持っている豊かな感性や表現力を引き出し、その子なりのよさを伸ばし、つくりだす喜びや創造性、豊かな情操を育てることができる教師を目指した追究的な授業を試みた。

(2) 研究の仮説と方法

初歩的な表現技法を習得し、表現の面白さを体感する。そうすれば、絵画表現への興味・関心が高まり、学習意欲がわく。

児童の心に響く物語(童話)を大型紙芝居として大量の絵画表現をし、描画、色や形の表現に慣れる。そうすれば、製作活動の過程において独自の表現の工夫、より美しい作品づくりに挑戦する努力の成果や感動を味わい、自らの感性や表現力、創造力を高めることができる。また、グループで制作することにより、協力することの意義や

ねらいを体得できる。

小枝など自然の材料を生かしたアート作品を作る。想像力を働かせて個性を存分に表現する。道具をうまく使いこなし、美しいものを創り出し、苦勞を乗り越えた喜びと感動を味わい、感性や創造性を高めることができる。また、教材開発ができる。

互いに作品を鑑賞し、仲間の前で物語を語ったり、作品展覧会を開催したりする。そうすれば、作品のよさや面白さなどに關心をもって見る力や、表し方の変化や特徴をとらえ、見方や感じ方を深めることができる。

幼児や小学校児童の前で製作した紙芝居を演じる。そうすれば児童の興味、関心、心を引きつけるために真剣に取り組み、物語を暗記して心情豊かに語る表現力が身に付く。また、幼児児童の心を引くコツを体得し表現の喜びを体感することができる。

現場の授業を参観する。そして、児童の興味・関心、表現意欲、発想の面白さなどの観察、児童の表現を援助する教師の言葉のかけ方や表情、援助の仕方、児童の学ぶ姿勢、児童の作品例、学級の雰囲気などを感じることができる。

(3) 授業研究の実践と考察

表現技法の基本を学習

色のにじみ、デカルコマニー、マスキング、スタンプングなどの技法を習得し、表現することの喜びや技法を習得した。

誰でもが個性的に表現できる技法を体験し、「今度はこの色を混ぜてみよう。」「わあー、面白い。」この技法を取り入れよう。」などと表現の喜びを体感することができた。

児童の心に響く物語(童話)を選び大型紙芝居の制作をし、表現の工夫に挑戦

⑦ 絵画表現したい物語、児童の心に響く物

語を低・中・高学年向きの内容別に別れ、活動グループを編成した。表現したい場面を話し合いで選択し、作業計画を立てる。(別紙)

- ・目的を明確にし、共通理解する。作業の約束を決める。(略)
- ・試し紙を用いて色の研究をする。
- ・場面の雰囲気、イメージを豊かにする技法や仕掛けを工夫する。
- ・製作計画に従い役割を分担する。他

学生は既習の表現技法を活かし、新たな表現技法を生み出し、思いのままに伸び伸びと制作に打ち込んだ。お話の内容や情景をイメージ豊かに表現するために、真剣に考える授業である。



① 上の絵は低学年用「さつまいも」を描いたAグループである。地面の下の砂土を表現することに苦労した。

校庭から土を持ってきて、ボンドでこねて着色した。失敗である。小石が多くてうまく画面に付かない。表現したい色にほど遠い。そこで、小石を網で取り除き、砂状にした。地面に色を付けてセメントボンドにした。全員が納得した。指で叩くように付けると、地面の中で「さつまいも」がおいしく育った雰囲気を出すことができたのである。大歓声が響いた。まさに表現の喜びを体感した姿である。

② 次の絵は中学年用「地獄のそうべえ」を描いたBグループである。地獄の熱湯にはまる人々を、画面と人物をバラバラにした。中



で浮いたり沈んだりする様子をうまく工夫した。次は、主人公がつながりをする様子に動きを加える工夫である。ペープサートの主人公が綱を渡るようにした。うまくいかない。ペープサートを持つのではなく、上からつって横に引く工夫をした。見事である。

更に「閻魔大王に歯を落とされる瞬間を「つり糸」を用いて丸ごと歯をストンと落とす等の様々な工夫を考えた。

③ 高学年用「さびしがりのホテル」では、一枚ずつ場面毎に描くのではなく、全ての場面の背景を「夕方」「夜」「海」「月明かり」などの美しい色彩で見事に表現した。

そして、登場してくる自動車や人は、切り絵を作って添付するなど、若くて思い切った大胆な表現も見られた。こうして、目標実現のために、努力し、失敗し、苦労をしながら表現を楽しむ活動は、きわめて重要な活動である。こうした過程における取り組みを通して、感じる事、考える事、イメージを広げることなどの経験を重ね、感性と表現する力を豊かにしていくのである。

また、こうした体験から体得した感性は教師になったとき、児童の表現力を豊かに発揮させる指導力になると考える。

小枝など自然の材料を生かしたアート作品を創作

これは小学校高学年の教材である。自然の小枝を人物や動物に見立てて、想像力を働かせて造形するのである。これは個性が存分に

はっきされて面白い学習である。

学生は、慣れない手つきでのこぎりを使ったり、電気ドリルを使ったりして夢中になって制作した。



このように数々の面白い作品ができた。小枝の形、枯れ葉やかんなくず、ダボ等の活用の仕方に工夫が見られた。

若々しい発想は個性的であり、一人一人の創造性が発揮された。道具の使い方にも慣れた。手を怪我した学生からは、血を止めるために心臓より高く手を挙げることや、その後を心配して電話する教師の優しさが大切であることも体験を通して学んだ。

できあがった自分の作品を携帯カメラに撮って母に送る等、喜ぶ姿も多く見られた。

学生は「自分にこんな才能があったなんて」と達成感を味わい、自分の表現した作品に感動し造形の楽しさを体感していた。

作品を鑑賞し合い自己反省をする。また、他の作品のよさを学ぶ。

互いに鑑賞し合って多くを学び合った。また、合宿と山梨市の「花咲ホール」にて、自分たちの作品を披露した。幼稚園の園長さんからも指導を受け、教師としての資質を高めるためのよい機会であった。



鑑賞後・実演後の感想

絵が美しいこと、登場人物の表情がわかること、話の内容がよく分かるようイメージ豊かに表現することの大切さに気づいた。

「かわいそうなぞう」や「すずめがお米を作ったら」等の紙芝居を見て、語りがすばらしいと聞き手をひきつけることに気づいた。

「白いウサギと黒いウサギ」のパスの表現技法がすばらしい。指やタンポンを使って草原の美しさ、ウサギの柔らかさを表現の工夫に感動した。

数々のしかけの工夫が面白い。

ゆっくり、表情豊かに語ることが大切。

物語は絶対に暗記すること、聞き手の反応を感じながら語り手はなりきって語ること。など自己を見つめて評価をし、学び合った。

最終目的は小学校で紙芝居を演じ、児童の反応から自己を反省し、さらに向上したいと願っている。花咲ホールでは園長先生から直接指導を受けて、反省したり、褒められたりして感激した。園児が真剣に聞いてくれて素直に反応してくれたことによって大きく達成感を味わうことができた。

略

現場の授業を参観して学ぶ

学生は、岐阜市内の研修校の中間発表会に参加させていただいた。学校を参観し、まず、驚いたのは児童の作品の面白さと迫力である。絵画作品は勿論、これから学習する「自然アート」の作品などである。授業では教師が児童の表現を援助する温かい言葉がけに感動した。特に、いつでも援助できるようにエプロンの中に、諸道具を入れて机間巡視し励ます教師の姿は印象的であったようである。

(4) まとめ

本学習ではどんな力を付けるのかという目標を明確にし、自らの学びを記録に残した。

学生は課題を追究し、自らの感性や創造性を少しずつ高め新しい自分を発見した。また、自己を評価し、学び方を体得しつつある。教師になるための道のりはまだ遠いけれど、この授業を通して児童の心の動きを受け止める教師としての援助ができる力、自らの感性や表現力を磨くことの大切さに気づいた。

学ぶ喜びを体感し、その意義を理解したと思われる。学生の記録より、

M学生「絵画が好きになった。自信がついた。教育者としてどんな力を付けたらよいかがよく分かった。表現することが楽しく、力も付いて良かった。」

A学生「常に感じる心と発想してイメージを広げる力を持ち、児童を理解できる教師になりたい。」「児童の願いが達成できるように、優しく援助できるようにになりたい。」

K学生「紙芝居づくり、実演はとても自分のためになった。自然アート作品では、新しい自分を発見できた。今、満足度100%。作品や努力を認める《褒め方》が分かって嬉しい。」

C学生「創る楽しさ、学ぶ楽しさを体感した。」「援助の仕方が分かって楽しい。」

Y学生「夢中になれた。色彩表現、道具の使い方も含めて自分に不思議な力が付いたようだ。自信となった。とても嬉しい。」

二年次に向けての課題

児童が表現したいと思う心の動きを受け止める力、援助する力を付ける。

理論と実践の関連の大切さと達成感を味わう授業を通して「学び方」を身につける。

更に自らの感性を高め、発想を豊かにする。